

『金剛頂經開題』にみる思想的特徴について

中村 本然

一、はじめに

弘法大師空海(七七四—八三五)は密教經典である『大毘盧遮那成仏神變加持經』⁽¹⁾(後、大日經と称す)と『金剛頂經』を所依として真言密教の教理を形成し、当時の仏教界にその是非を問うている。筆者は前に空海は二大經典である『大日經』『金剛頂經』を重要視しながらも『金剛頂經』により比重をおいた思想的展開を示していることの論考を提出している。⁽²⁾

この度の報告においては『金剛頂經開題』⁽³⁾を通して、空海の『金剛頂經』観について改めて検証したい。空海の『金剛頂經』に関する考証としては『金剛頂經開題』並びに『教王經開題』⁽⁴⁾が現存している。両者はともに不空(七〇五—七七四)訳『金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經』三卷⁽⁵⁾に関する空海の見解を論述したものである。

二、『金剛頂經開題』について

『金剛頂經開題』において、空海は『金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經』を三種に大別して釈する。今此の經を釈するに略して三分を顕す。初めには綱緒を陳べ。次には題額を演べ。後には經文を解す。⁽⁶⁾

初めには概要、次には経題、第三には経文という構造である。

A、綱緒について

『金剛頂経開題』『綱緒』の構想は、空海の初期の著『辯頭密二教論』の「大意序」にも見いだすことができる。そもそも『辯頭密二教論』は「秘密金剛頂経」の教説によるという言葉からはじめられており、空海自身が『金剛頂経』を注視する姿勢は論全体を通して散見される。その『辯頭密二教論』には廃詮談旨・一真法界・体妙離言等の絶離の境涯は顕教の領域であり、因位の人などの四種言説には及ぶことはできない。ただ自性法身のみ如義真実の語によってその絶離を開示することができ、この教を真言秘教とし、『金剛頂経』などがそれに相当すると明言している。⁸⁾ 因みに『釈摩訶衍論』所説の如義言説・一一識心が法身の境涯を縁することも併せて論じられている。それでは綱緒についてはじめよう。

初めに綱緒とは。蝸角の民は羅睺に旨しい。蚊𦏧の族は大鵬に聾たり。況や法仏の三密は四種の言語も及ぶこと能わず。曼荼の四身は九種の心識も縁すること得ず。⁹⁾

蝸牛の角にも喩えられる極微の民は極めて巨大な羅睺を認知することはできない。蚊の睫毛を住処とするものは大鵬の醸し出す大音響を聞くことはできない。このように法身の三密については、相言説・夢言説・妄執言説・無始言説等の四種言説によって言及することはできない。曼荼羅を構成する四種法身を多一識心等の九種心識も認識することができない。

空海が『釈摩訶衍論』所説の「如義言説」を法身の言説と規定するのは『辯頭密二教論』であった。¹⁰⁾ しかも空海は『釈摩訶衍論』の不二摩訶衍法を自性法身と見なす。¹¹⁾ ところで『釈摩訶衍論』において如義言説は真如門の言説であり、不二摩訶衍法は一切の教説を離れた存在として論じられている。¹²⁾ いうなれば如義言説でも及ばない境涯として不二摩訶衍法は存在する。そのような相容れない関係にある如義言説と不二摩訶衍法を繋ぎ合わせたのは空海にはかならない。空海自身もそのことを充分に弁えていたのであろう。『金剛頂経開題』では『釈摩訶衍論』について「その絶離を称し、……三大域を異にし、一心、源を別てり」と扱うのである。¹⁴⁾ 『釈摩

訶衍論』に関して自らの依用の有り様に矛盾を強く感じていたのは空海自身であったと考える。それでもなお空海の抱く密教思想を主張するために『釈摩訶衍論』は必須の論であったに相違ない。『金剛頂經開題』の教説にもどることにしたい。

是の故に名言絶えて機水洒れ。身土隠れて応月没す。大恵懇ろに請ぜしかども能仁許したまわず。迦葉至りて扣しかとも寂尊猶し闕じたまう。海妙は但し月光を見。地藏は略、日蔽を讃ず。大衍には其の絶離を称し。地論には其の不説を顕わす。三大、域を異にし一心源を別り。

廢詮の客は郊を憩って牛を放ち。絶慮の賓は廟に臨んで鶏を待つ。冰照の椎輪は轅を染浄の岳に摧き。水波の游艇は楫を風水の海に折る。¹⁵

従来の教え(顕教)による限り、真実の理を表詮することもなくなり、勝れた宗教的素養を具えた人も洒れ果ててしまっている。法身仏は自らの浄土に身を隠し、応化仏もついに真実の法を説く機会を逸してしまっている。經典には以下のように明かされている。『入楞伽經』には、如来への大慧菩薩による百八の質問が採り上げてある。その中で如来の内証に関する問いに仏は答えを与えていない。¹⁶『大般涅槃經』にも、迦葉童子が法身の秘密の義について質疑を起しているが、如来は答えていない。¹⁷『大乘同性經』でも、海妙菩薩は仏三身の中において報身・応身の二身は月体・月光として観ることができたが、法身は無色無形にして、ついに眼にすることができなかったとある。¹⁸また『地藏菩薩請問法身讚』には、地藏菩薩は法身を礼拝する時に、一切有情の在纏本有の仏性を礼したことが明かされるが、直ちに色相具足の理智不二法身を説くことはなかったことが記されている。¹⁹『釈摩訶衍論』という不二摩訶衍法は一切の機根を絶していると言われている。²⁰そして『十地經論』には、因分可説・果分不可(可)説とされている。²¹また『釈摩訶衍論』に開設される体相用の三大は不二摩訶衍法の領域と異にし、一心も不二法の本源とは一線を画している。

空海は言葉^{ことば}をさらに続けている。廢詮談旨諦をもって究極とみる人は、未だ自心の根源を知ることはない。諸法の実相を言亡慮絶と解する人は、如来滅後一千年を経て出現した清辨菩薩のように修羅宮に入って長寿の身を得て、弥勒菩薩の下生を待って三会の暁を期待するようなものである。水と水、光と影が相い離れたものでないように、法性と無明は一如である。無明の痴惑は本よりはれ

法性にして、痴惑によって法性が変じて無明となる。その水と波は因果の関係にあるが、水を離れて波は無いように、波無くして水は存在しない。このような境地にあっても究竟の果を前にしては風水が海に没するように究極の果分に至ることはできない。

『金剛頂経開題』と同様の教説が『辯顕密二教論』にも見られる。『辯顕密二教論』には、法仏の説を密教とし、応化仏の説を顕教と規定する。如来内証智の境界である三密の法門は等覺・十地の菩薩も見聞できないと明かす²²。従って顕教の枠に収まる『十地経論』では「因分可説・果分不可説²³」といい、『釈摩訶衍論』には「機根を離れ²⁴」と説かれ、『成唯識論』は「尋思言議道を超過す²⁵」と明かし、『中論』は「心行言語断²⁶」と論じるといふ。醍醐の教である密教は、顕教が絶離とする如来の内証を開演する。また『辯顕密二教論』には『十地経論』・『華嚴五教章』のいう性海不可説と龍猛菩薩の『釈摩訶衍論』の円円性海不可説とは同質の意とされる。ともあれ因分可説は顕教の領分であり、顕教が果分不可説とする境界を扱えるのは密教である。『金剛頂経』にはその境地が克明に説かれている²⁷、と定義する。空海はこのような手法によって密教の特徴を紹介するが、この説相は『金剛頂経開題』の綱緒と非常に類似する内容になっている。但、全く同質とみなし得ないのは、『辯顕密二教論』で「果分不可説」として紹介した『十地経論』の一文を『金剛頂経開題』では「(果分) 不説」と言い換えており、空海によって「不可説」から「不説」へと質的転換が諮られていることである。すなわち、『十地経論』は果分の境地を「説くべきでない(意図的に説くことをしない)」から「説くことはない、或いは説けない」とされるにいたっている。

それにもまして指摘しておかねばならないのは『金剛頂経』と『釈摩訶衍論』との関わりであろう。『辯顕密二教論』において空海は『釈摩訶衍論』で「教説を離れ機根を絶する」とする不二摩訶衍法について自性法身・秘密蔵と同一視すると共に、不二摩訶衍法を詳述するのが『金剛頂経』であると明言することである。

空海の意向が反映されていると考えられる『金剛頂経開題』には、一つには『釈摩訶衍論』の教説による顕密二教の教判論の構築、そして『釈摩訶衍論』の思想による『金剛頂経』解釈がその特徴として挙げられる。さらに『金剛頂経開題』に触れることにしよう。

妙雲開塔の朝。金薩灌頂の時。三密の秘蔵は神光を赫して大虚を曜し。五智の大我は妙相を湛えて以て靈台上に坐す。

十六の輪王は各々自国を領し。四摂の宰輔は職を分つて他を利す。…(中略)…各々大日の垂拱に奉うること。衆星の北辰に共うが如し。…(中略)…十八瑜伽同じく此の趣を示す。斯れ乃ち此の身を捨てずして頓に仏位を証す。不共の仏法速疾神通の教なり。輪王種性秘密加持に非ずよりは。何ぞ能く不思議の法を聞き難信の教を信ぜん。²⁸⁾

本地が妙雲如来である龍猛(樹)が南天の鉄塔を開いて金剛薩埵から灌頂を受け密教の法を継承した時、三密の法門は神妙なる輝きで大虚空を照らし、五智を具える大日如来は靈妙なる相を湛えて鎮座し、十六大菩薩は個々の徳性を堅持し四摂菩薩は多様な教化の相を示現していた。曼荼羅の諸尊が大日如来に仕える様は、多くの星が北極星に対するようであった。『金剛頂經』所説の十八瑜伽の法門は父母から生じた肉身に即して仏位を証する速疾神通の教である。転輪聖王にも喩えるべき素質の優れた人も如来の秘密の加持力なくして不思議神通の法を聞き、信受することはできないであろう、と説明する。

密教の法を金剛薩埵から南天の鉄塔の中で継承したのは龍樹菩薩であった。『金剛頂經開題』には鉄塔を開扉した龍猛を『釈摩訶衍論』の造論者である龍樹と同一視する理解が伺える。空海は『秘密漫荼羅教付法伝』²⁹⁾において、龍猛の本地を妙雲如来と説明するが、龍猛を妙雲如来とするのは『釈摩訶衍論記』³⁰⁾を著した聖法である。ここにも空海の『釈摩訶衍論』に対する意向が看取される。

また『金剛頂經』の教説によって速疾成仏や(如来)秘密加持が論じられが、同様の内容を『辯頭密二教論』の教説に求めることが可能である。即ち『辯頭密二教論』には『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』からの引用がある。もし頭教によって修行するものは三大劫を経て無上菩提を証する。もし毘盧遮那自受用身所説の内証の法及び大普賢金剛薩埵他受用身の智によるならば、現生において密教の阿闍梨に遇い、曼荼羅に入ることができる。³¹⁾加持の威徳力によって速やかに無量の三昧耶を証することになる。弟子の我執を変質せしめて、仏家に再生させることができる³²⁾と説かれている。現生(即身)成仏や曼荼羅阿闍梨の加持力に論及する内容であることはいうまでもない。

B、題額について

次に題額である『金剛頂瑜伽一切如来真実撰大乘現証大教王経』の考証がなされている。空海は1惣名・別名、2人法喩、3言名成立(句)、4経題、5順相縁・逆相縁、6六合釈・六相義・四悉檀・三声等、7仏(五仏配当)、8修行門(三密行)、9经文の義の九項目による解説を試みている。

まず1十八会に惣名と別名の存在を示唆する。空海は十万偈からなる『金剛頂経』には十八会の各会にいずれも「金剛頂瑜伽」を惣名とし、併せて十八会各会にはそれぞれに別名を有することを明かす。いま『金剛頂経開題』に明かされる惣名に対する別名と説処を列記してみよう。因みに一切如来真実撰大乘現証大教王とは初会に与えられた名称である。³²また第二会以下は不空訳の『金剛頂経瑜伽十八指帰』³³に基づいている。

初会 〓 〈別名〉 一切如来真実撰大乘現証大教王

第二会 〓 〈別名〉 一切如来秘密主瑜伽 〓 〈説処〉 色究竟天

第三会 〓 〈別名〉 一切教集瑜伽 〓 〈説処〉 法界宮殿

第四会 〓 〈別名〉 降三世金剛瑜伽 〓 〈説処〉 須弥盧頂

第五会 〓 〈別名〉 世間出世間金剛瑜伽 〓 〈説処〉 波羅奈国の空界

第六会 〓 〈別名〉 大安楽不空三昧耶真実瑜伽 〓 〈説処〉 他化自在天宮

第七会 〓 〈別名〉 普賢瑜伽 〓 〈説処〉 普賢菩薩の宮殿

第八会 〓 〈別名〉 勝初瑜伽 〓 〈説処〉 普賢の宮殿

第九会 〓 〈別名〉 一切仏集会拏吉尼戒網瑜伽 〓 〈説処〉 真言宮殿

第十会 〓 〈別名〉 大三昧耶瑜伽 〓 〈説処〉 法界宮殿

第十一会 〓 〈別名〉 大乘現証瑜伽 〓 〈説処〉 阿迦尼吒天

第十二会 〓 〈別名〉 三昧耶最勝瑜伽 〓 〈説処〉 虚空界菩提場

第十三会 〓 〈別名〉大三昧耶真実瑜伽 〓 〈説処〉金剛界曼荼羅道場

第十四会 〓 〈別名〉如来三昧耶真実瑜伽

第十五会 〓 〈別名〉秘密集会瑜伽 〓 〈説処〉秘密処

第十六会 〓 〈別名〉無二平等瑜伽 〓 〈説処〉法界宮

第十七会 〓 〈別名〉如虚空瑜伽 〓 〈説処〉實際宮殿

第十八会 〓 〈別名〉金剛宝冠瑜伽 〓 〈説処〉第四静慮天³⁴⁾

以上のようになる。『金剛頂經』の十八会について『金剛頂經開題』には

此の十八会の瑜伽。或いは四千頌。或いは五千頌。或いは七千頌。都て十萬頌と成る。五部四種曼荼羅四印を具し。三十七尊を具し。一一の部に三十七を具し。乃至一尊に三十七を成ず。亦四種曼荼羅四印を具す。互相渉入すること。帝釈の網珠の光明光映して展転して無限なるが如し。一一の仏等の身分。一一の毛孔。一一の相。一一の随形好。一一の福德資糧。一一の智慧資糧。果位に住して虚空に同じ。然れども各各に分齊ありて各々雜乱せず。同じく四身を証す。所謂自性身受用身變化身等流身なり。

若し修行者善く此の理趣に通達すれば。本尊の三摩地と相応して即ち如上の諸尊と平等無異なり。如上の十八会同しく金剛頂相應の法を説けり。故に通惣して金剛頂瑜伽と名づく。如上惣別名の略釈畢んぬ。³⁵⁾

と明かし、十八会の瑜伽、また四千偈頌、五千偈頌等、総て併せて十萬偈頌となる。『金剛頂經』には仏部など五部、四種曼荼羅、四種智印を具し、三十七尊を備え、一一の部や尊にも三十七尊を具有している。互いに渉入しあうこと因陀羅珠網の如くであるが、それぞれに雜乱することはなく、自性身・受用身・變化身・等流身の四身を証している。もし修行者が『金剛頂經』に開演される真意に到達するならば、本尊の覚りの境地と相応じることになり、諸尊と平等なる存在となる。十八会にはすべて金剛頂瑜伽の法が説かれているので、いまはその名称を冠するという。

また2人・法・喩に準えて經典の題名について考証する。『阿弥陀經』や『薬師經』は人に約した經名であり、『大般若經』・『大涅槃

『槃經』は真実の法としての経題であり、『妙法蓮華經』は法喩によるものである。人法喩の三者を想定可能な經典として『大方広仏華嚴經』を指摘し、『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經』についても人・法・喩による釈を紹介する。喩||金剛頂、人||一切如来、法||真実撰大乘現証大教王經となる。³⁶⁾

人||『阿弥陀經』『葉師經』

法||『大般若經』『大涅槃經』

法・喩||『妙法蓮華經』

人・法・喩||『大方広仏華嚴經』

※『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經』

喩||金剛頂、

人||一切如来、

法||真実撰大乘現証大教王經

更に i 人法・ii 法喩・iii 理智・iv 体用・v 教理・vi 行果・vii 能所・viii 因果・ix a 非因非果・ix b 体用・x 相用の十対による視点も紹介する。³⁷⁾

3 梵(悉曇)の言名成立・唐の言名句に約して経題の深意を重ねて述べる。「声字義に積するが如し」とあるように、『声字実相義』の思想を根底にした解釈である。³⁸⁾

続いて4 経題。『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經』の題号について『金剛頂経開題』では、「金剛頂」「一切如来」「真実」「撰大乘」「現証」「大教王」「經」の一々について釈明する。³⁹⁾「金剛頂」を除いた解釈には『釈摩訶衍論』所説の三門(三自門・一心門・不二門)の教説を用いている。

「金剛(頂)」には顕乗と秘密乗の相違があり、「金剛」に関する顕教の見方には菩薩の五十位に能入の智と所入の定による百種の

別をみる。一方、密教では豎義として能入智・所入定の百種の金剛を、横の義にも百の差別を認める。また一一の境地に十地を配当するので千の金剛になる。その数量は微塵数にもなり不可説不可説の金剛ということになる。それは集約すれば三十七の金剛となる。その金剛に能入の金剛智、所入の金剛定、能証の金剛人を分別するので百二十の金剛となる。『金剛頂經』は密教を象徴する三十七尊とともに三十七尊の三摩地を開演したものである。「金剛(頂)」といわれる理由はそこにあると解説する。⁴⁰⁾

次に「一切如来」。顯教では十方及び三世の諸仏を一切如来と規定する。密教では大日如来等の五仏を一切如来とみる。⁴¹⁾五仏は曼荼羅上に開かれた諸尊の根本とみなす。この五智(仏)に自の五智仏と他の五智仏を建立する。他の五智仏には先成就者と未成就仏があり、この中の先成就に自先成就と他先成就を設定する。

故に先成就の本覚の仏と名づく。此の本覚に又三種の差別有り。一には三自一心門の本覚。二には一一心真如門の本覚。三には不二摩訶衍一心の本覚なり。初めの三自一心本覚の中に四の別有り。染浄本覚清浄本覚一法界本覚三自本覚是れなり。真如門の本覚に又二の別有り。清浄真如本覚染浄真如本覚なり。是くの如くの本覚重重無量なり。今此の經に示す所の本覚は。通じて一切の本覚を撰し。別しては不二門の本覚を表す。此の本有法身其の数無量なり。故に一切如来と云う。此の如来は余の一切門の撰すること能わざる所なり。然も此の不二本覚は能く一切門の仏を撰す。故に頂と名づく。如来頂は則ち最上最勝の義の故に。⁴²⁾

先成就の本覚仏にいう本覚に三自一心門の本覚・一一心真如門の本覚・不二摩訶衍一心の本覚の三種がある。さらに三自一心の本覚に染浄本覚・清浄本覚・一法界本覚・三自本覚の四種の別を、一一心真如門本覚には清浄真如本覚・染浄真如本覚があると釈する。『金剛頂經』に開設される本覚は一切の本覚を撰し尽くし、不二門の本覚を表詮すると主張する。不二の本覚は一切門の仏を撰し尽すので金剛の「頂」と称される。ここに開かれる教理が『釈摩訶衍論』を根拠にしていることは否定できない。しかしながら、一一心真如門の本覚や不二摩訶衍一心の本覚等は『釈摩訶衍論』の範疇を逸脱する教理で、空海の視座に基づく概念でもある。

続いて「真実」についてである。

次に真実と言っぱ。真は真如、実は実知実相なり。真に十種有り。一には根字事真。二には本字事真。三には遠字事真。……如

に又十種有り繁の故に之れを略す。真とは真理、如とは如理。此の真と如とに各々二十種を具す。十種の清浄の真理は十種の清浄の本と相応す。十種の清浄の如理は十種の清浄の覚と相応す。……今言う所の真如は。通しては染浄清浄二種の真如を撰し。別には自門秘密の真如を顕はす。……実知実相とは。三自門の実知実相。一心門の実知実相。性徳円円海の実知実相。各各重重差別なり。今言う所の実知実相は不二門の実知実相是れなり。⁴³

「真実」の真とは真如、実は実知実相とする。真である「真如」を『釈摩訶衍論』所説の根字事真等の十種の「真」と鏡字事如等の十種の「如」の説によって説き明す。『金剛頂経』における真如は染浄真如と清浄真如をも包摂する密教特有の真如とする。また実知実相には三自門（生滅門）・真如門・性徳円円海の実相がある。いまの実相とは三門中不二門の実知実相であるという。前述のように『釈摩訶衍論』の教説による理論構築を見ることができ。

次に撰大乘と言っぱ此れに二有り。初めに能撰大乘。次には所撰大乘なり。能撰大乘とは。根本惣体の不二大乘。所撰大乘とは。二重三十二の大乘なり。本能く末を撰す故に撰大乘と云う。又三十二の大乘に各各に本有り末有り。各各の本法は能く末法を撰す。故に撰大乘と云う。⁴⁴

「撰大乘」には能撰大乘と所撰大乘があり、能撰大乘は『釈摩訶衍論』の「立義分」に開示される根本総体の不二摩訶衍法である。所撰大乘は前後両重の三十二法門である。

現証とは此れに二つ有り。初めには法爾現証。次には随縁現証なり。法爾現証に又三あり。二門及び本体なり。三種の門の本覚の仏は。自爾に一切の法を現覚して諸の功徳を証得するが故に。随縁現証とは。随縁の本智は生死に流転して源に背いて時久し。若し内熏外縁の力に遇えば生死を厭うて涅槃を欣い。始覚の日光を発して無明の闇夜を照らし。遍く本有の宝蔵を知って悉く自家の功徳を得。之れを現証と名づく。三門の現証は差別無量なりと云うと雖も。法爾随縁に過ぎず。謂う所の現証の通別は前に准じて之れを知れ。⁴⁵

「現証」に法爾現証と随縁現証の別をみる。法爾現証には真如門・生滅門の二門と本体としての不二門の法爾現証がある。生滅門

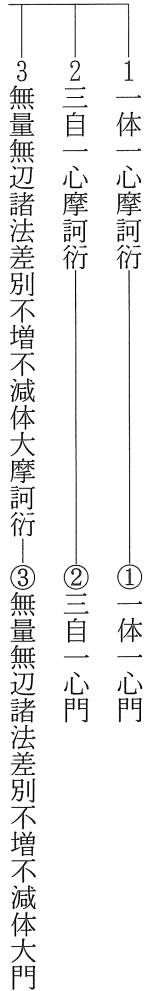
等の三種門の本覚仏は本有として真実を覚知する存在である。随縁現証における随縁の本覚の智は生死流転して久しく本源を覚知することはない。本有の内薫や外縁の力の導きによって涅槃を希うことになり、無明の闇を破って本源にいたるといふ。生滅門・真如門・不二門の現証には無量無辺の諸相がみられるが、いずれにしる法爾・随縁の範囲を離れるものではない。

大教王とは。大に三種有り。一には体大。二には相大。三には用大なり。初めに体大の中に又四つあり。一には無量無辺諸法差別不増不減体大。二には寂靜無雜一味平等不増不減体大なり。此の二法に又二門の大有り。故に四と成る。相大に又四あり。一には如来蔵功德相大。二には具足性功德相大なり。此の二法に又二門の大を具す。故に四と為る。用大に又四あり。一には能生一切世間善因果用大。二には能生一切出世間善因果用大なり。此の二法に又二門の大を具す。故に四と為る。三種の大義を数えれば各々四大を具して都て十二大有り。此の十二の大は皆是れ生滅門の法門なり。真如門に約すれば又三大の義を具す。是くの如くの二門の大の義、能く一切の教法を含む。故に大教と曰う。此の大教各々自門に於いて自在を得る故に之れを王と名づく。……若し豎の次第に約すれば是くの如くの浅深差別有り。

若し横平等に約すれば悉く皆平等平等にして一なり。然れども終に雜亂せず。⁴⁶

「大教王」についてである。大としての体大・相大・用大の三大説は、本来『大乘起信論』の「立義分」に説示される。ところで『金剛頂經開題』に依用される三大は『釈摩訶衍論』⁴⁷に開設される「立義分」の理解に基づいている。

- A 不二摩訶衍 — 離機根故、離教説故 — 性徳円満海
- B 三十二法門 — 応於機故、順於説故 — 修行種因海
- a 前重八法八門





三大義について差別相（縦差別）を論じた後に、横平等の立場からすべての差別相を「平等平等にして一なり」と説き明かす。これも『釈摩訶衍論』が三十二（三）法門の建立で見せた説相である。

経とは貫串の義・撰持の義なり。……能く教の線を以て人天の花を貫いて三途に乱墮せず。……是くの如く真実語を経と為し、方便を緯と為して。法界曼荼羅の錦繡綾羅を織り成して。遍一切処の定恵の身を莊嚴す。故に経と云うなり。⁴⁸⁾
 「経」とは貫き撰め持つことであり、勝れた教えによって人・天界をよく保持して決して地獄等の三界に墮さしめない（教である）。

真実語を経として、教化の方便を緯として、錦繡綾羅にも喩えられる法界曼荼羅を現出せしめた経と紹介している。

これまで『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』の経題に関して特に『釈摩訶衍論』との関係に注目した考証を行った。題号の一切如来・真実・撰大乘・現証等においては『釈摩訶衍論』の不二摩訶衍法との繋がりが強調されていた。

経題には、5 順相縁・逆相縁に約した試みも散見した。⁹⁴即ち順相縁は題名を金剛・頂・一切・如来・真実・撰大乘・現証・大教・王・経の順番に、逆相縁は経名を経・王・大教・撰大乘・如来・一切・頂・金剛のように逆に釈するのである。その他にも6 六合釈・六相義・四悉檀・三声等からの説明も示唆するが、詳細には明かさないとしている。⁹⁵

また7 仏に相応せしめる視点も紹介する。金剛頂||大日尊、一切如来||阿閼仏、真実||平等性智の仏(宝生仏)、撰大乘||無量寿仏、現証大教||不空成就仏、王||五仏、経||五仏の三摩地(を説く)と解する。⁹⁶図示すると左記のようになる。

※『金剛頂・一切如来・真実・撰大乘・現証大教・王・経』

金剛頂||大日尊、

一切如来||阿閼仏、

真実||平等性智の仏(宝生仏)、

撰大乘||無量寿仏、

現証大教||不空成就仏、

王||五仏、

経||五仏の三摩地(を説く)

8 修行門に約する視点も提出する。〈金剛〉を法仏の三密とし、身密||仏部、語密||蓮華部、意密||金剛部に相応せしめ、三密の福德資量||宝部、三密の作業化用||羯磨部に配当する。〈頂〉は密教の三密行が二乗や大乘の菩薩の修行を超える行の意とみる。統く〈一切如来〉は身密・仏部、〈真実〉は語密、〈撰大乘〉は意密、これら三密行による菩提の証果を〈現証〉と理解する。〈大教

王経」とは真言密教が諸教の王たることの主張とみる。⁵²⁾

※『金剛・頂・一切如来・真実・撰大乘・現証・大教王経』

金剛||法仏の三密(身密―仏部、語密―蓮華部、意密―金剛部、三密の福德資量―宝部、三密の作業化用―羯磨部)

頂||顕教の修行を超過する密教の三密行

一切如来||身密・仏部、

真実||語密、

撰大乘||意密、

現証||三密行による菩提の証果

大教王経||諸教の王たる真言密教

さらには9経の題目にすべての文義を撰すことを明かす。即ち『金剛頂経』の所説を四智印とみなすのである。経題の〈如来〉は大智印、〈金剛〉は三昧耶智印、〈真実〉は法智印、〈大教王〉は羯磨智印の要義をそれぞれに撰し尽すとす。⁵³⁾

※『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』

如来||大智印、

金剛||三昧耶智印、

真実||法智印、

大教王||羯磨智印

C、経文について

経文の釈については、品名を挙げ続いて解釈するとしながらも「金剛界大曼荼羅広大儀軌品之一」の釈明に止まり、それ以上の論

及を見いだすことはできない。

經文を釈せば、此れに二あり。初には品の名。次には正の經文なり。品の名とは、金剛界大曼荼羅廣大儀軌品の一とは。金剛界とは惣名、已下は別名なり。

金剛界とは梵には^१ वज्रと云い。^२ वज्रをば翻じて金剛と云う。^३ वは界の義、身の義、体の義、差別の義なり。金剛身とは法身の身密是れなり。金剛は不壞に名を得。身は積聚に由つて義を立つ。如来は戒定慧等の五分法身。及び常樂我淨等の四種法身。法身、般若、解脱等の三點及び三十七菩提分法。十八不共法を具す。是くの如くの無量の法を以て仏体と為るが故に身を以て之れに名づく。

界とは法界・心界・衆生界の三種差別なり。法界は則ち先覺者。心界は則ち修行者。衆生界とは十方三世の六趣の有情非情なり。又界に十種有り。十種の法界は是れ如来の金剛曼荼羅なり。十界の身相を聚めて一箇の曼荼羅身と為るが故に界と名づく。又界は是れ差別の義なり。如来の身は六大を以て体と為るが故に界と云う。⁵⁴

金剛身とは法身の身密であり、金剛とは不壞のこと、身は積聚の意である。如来は戒・定・慧・解脱・解脫知見の五分法身、常樂我淨の四種法身、法身・般若・解脱の三點、三十七菩提分法、十八不共法を堅持している。このような無量無辺の法を本質とする身を法身と称する。界とは法界（先覺者）・心界（修行者）・衆生界（十方三世の六道の有情非情）の三種の別をさす。また如来の金剛曼荼羅の十界があり、如来の身体が地・水・火・風・空・識の六大を体とするので界と積す。

大曼荼羅とは一切如来に四種の身を具す。謂わく、大曼荼羅身・三昧耶曼荼羅身・羯磨曼荼羅身・法曼荼羅身なり。此の会に四品有り、即ち四身を表す。初の品には大曼荼羅身に三十七を具することを説くが故に爾か云う。⁵⁵

大曼荼羅とはすべての如来に大曼荼羅身・三昧耶曼荼羅身・羯磨曼荼羅身・法曼荼羅身の四種の身を有する意である。初品には大曼荼羅身に三十七尊を具することに言明する。

廣大とは一一の尊の身量、虚空法界と等しきが故に。儀軌とは儀は儀形、軌は軌則なり。是の法身は能く一切の菩薩二乘天人等

の仰ぐ所の則なり⁶⁶

广大とは、『金剛頂経』に開示される一一の諸尊の身量が虚空法界に等しいことと説く。儀軌とは儀形と軌則のことである。菩薩・縁覚・声聞・天・人等は法身如来を自らの規範としている。

又此の品には一切如来の法則と弟子を導入する儀法とを説くが故に爾か云うなり。四種の智印各別にして区を分つ。類を以て相聚するが故に品と云う。諸品の中に此れ最初なるが故に「一」と云う⁶⁷。

この品は、一切如来の法則と弟子を曼荼羅に導き入れる方法を示すので「儀軌品」と名づけられる。四種の智印はそれぞれに分けられ説明される。すべての品の最初に当たるので「一」と解している。

三、まとめ

『辯頭密二教論』は空海が比較的早い時期に密教の特徴についてまとめた書物とされている。『辯頭密二教論』において「秘密金剛頂経」を思想的根拠とすると告白するように、この論の特徴として『金剛頂経』との密接なる関係が指摘できる。空海は『辯頭密二教論』において、大別して法身の説法の有無、果界の説不説、成仏の遅速、三密の修行論、教益の優劣という視点から頭教に対する密教の優位性を強調することになるが、その典拠は基本的に『金剛頂経』に求められている。

空海の『金剛頂経』観が示される『金剛頂経開題』の説相には、『辯頭密二教論』を意識した様子が随処に伺われる。論述形式も含め、『辯頭密二教論』に非常に酷似する内容になっており、『辯頭密二教論』の教説を補完しより充実させている。即ち頭教の及ばない領域を演説するのが密教であり、具体的には『金剛頂経』であると強調するのである。

『釈摩訶衍論』の不二摩訶衍法は一切の教法や機根を絶した法として施設されている。『辯頭密二教論』において空海は不二摩訶衍法の機根や教説を密教の機根や教説と捉える。『金剛頂経』は『釈摩訶衍論』が沈黙する不二摩訶衍法を開演した經典と規定する

のである。

真言密教に立脚した説明が試みられた『金剛頂經開題』には『釈摩訶衍論』の思想を色濃く反映した論考が押し進められている。そこには『釈摩訶衍論』との緊密性を顕示すると共に『釈摩訶衍論』を『金剛頂經』の範疇で捉えておきたいと考える空海の意図が窺える。『金剛頂經開題』にはその他にも『声字実相義』所説の「言名成立相」や『即身成仏義』にいう「即身成仏」「四種曼荼羅」「三密行」、「吽字義」の明かす「字義・字相」などの教説を自在に操りながら『金剛頂經』の解釈がなされている。それらも『金剛頂經開題』の特徴として列挙しておくことができよう。

註

- (1) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』△『大正藏』十八所収▽
- (2) 拙論「立義分読誦信仰について—金剛界三十七尊との関わりを中心として—」△『高野山時報』第三〇五九号、三〇六一〜三〇六四号、二〇〇六年▽
- (3) 『金剛頂經開題』△『弘法大師全集』一▽。『金剛頂經開題』に関する解説として、勝又俊教『金剛頂經開題』△『弘法大師著作全集』第二卷▽、遠藤祐純『金剛頂經開題』△『弘法大師空海全集』第三卷所収▽、東智學『金剛頂經開題』△『定本弘法大師全集』第四卷所収▽がある。また頼諭の『金剛頂經開題』理解に対する研究報告として、金剛頂經研究会「頼諭撰『金剛頂經開題愚草』本文と国訳(一)(二)」△『大正大学総合仏教研究所年報』第十七・十八号▽がある。
- (4) 『教王經開題』△『弘法大師全集』一所収▽
- (5) 『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教主經』△『大正藏』十八▽
- (6) 『金剛頂經開題』△『弘法大師全集』一・六九〇▽
- (7) 『辯頭密二教論』△『弘法大師全集』一・四七四▽
- (8) 『辯頭密二教論』△『弘法大師全集』一・四八五▽
- (9) 『金剛頂經開題』△『弘法大師全集』一・六九〇▽
- (10) 『辯頭密二教論』△『弘法大師全集』一・四八五▽
- (11) 『辯頭密二教論』△『弘法大師全集』一・四八〇▽
- (12) 『釈摩訶衍論』△『大正藏』三十二・六〇六a▽
- (13) 『釈摩訶衍論』△『大正藏』三十二・六〇一c▽
- (14) 『金剛頂經開題』△『弘法大師全集』一所収▽
- (15) 『金剛頂經開題』△『弘法大師全集』一・六九〇▽
- (16) 『入楞伽經』△『大正藏』十六・五二一b c、五六九a▽
- (17) 『大般涅槃經』△『大正藏』十二・六一九b▽
- (18) 『大乘同性經』△『大正藏』十六・六五一c▽
- (19) 『百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚』△『大正藏』十三・七九〇a b▽

- (20) 『釈摩訶衍論』△『大正蔵』三十二・六〇一c▽
- (21) 『十地経論』△『大正蔵』二十六・一三三b▽
- (22) 『辯頭密二教論』△『弘法大師全集』一・四七四▽
- (23) 『十地経論』△『大正蔵』二十六・一三三b▽
- (24) 『釈摩訶衍論』△『大正蔵』三十二・六〇一c▽
- (25) 『成唯識論』△『大正蔵』三十一・五七b▽
- (26) 『中論』△『大正蔵』二十九・二四a▽
- (27) 『辯頭密二教論』△『弘法大師全集』一・四八二▽
- (28) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九〇～六九一▽
- (29) 『真言密教曼荼羅教付法伝』△『弘法大師全集』一・五▽
- (30) 『釈摩訶衍論記』△『大日本統蔵経』一・七二一四・三六六b▽
『釈摩訶衍論』△『大正蔵』三十一・五九二a▽
- (31) 『辯頭密二教論』△『弘法大師全集』一・四九六▽ 『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』△『大正蔵』二十・五三五b▽
- (32) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九一▽
- (33) 『金剛頂経瑜伽十八指帰』△『大正蔵』十八所収▽
- (34) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九一～六九四▽
- (35) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九四～六九五▽
- (36) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九五～六九六▽
- (37) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九六▽
- (38) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九六～六九七▽
- (39) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九七以下▽
- (40) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九七～六九九▽
- (41) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・六九九▽
- (42) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇〇～七〇一▽

- (43) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇一～七〇二▽
- (44) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇二▽
- (45) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇二～七〇三▽
- (46) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇三～七〇四▽
- (47) 『釈摩訶衍論』△『大正蔵』三十二・六〇〇a～六〇二a▽
- (48) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇四～七〇五▽
- (49) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇五～七〇六▽
- (50) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇六▽
- (51) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇六▽
- (52) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇六～七〇七▽
- (53) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七〇八▽
- (54) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七一一▽
- (55) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七一一～七一二▽
- (56) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七一二▽
- (57) 『金剛頂経開題』△『弘法大師全集』一・七二二▽

△キーワード▽ 『辯頭密二教論』、『釈摩訶衍論』、不二摩訶衍法、龍樹、
法爾現証、隨緣現証